

若手研究者の活躍を促進するために ②

組織を改革し、次世代のリーダーを育てる
 ～次世代研究スーパースター養成プログラム～

文部科学省 科学技術・学術政策局 基盤政策課
 九州大学 研究担当理事・副学長 村上 敬宜

若手研究者に活躍の機会を与え、優秀な人材を確保するために、文部科学省が平成一八年度より実施している科学技術振興調整費「若手研究者の自立的環境整備促進」プログラム及び大学の取組例について、先月号に引き続き紹介します。

今回は、平成一八年度に採択された九州大学における取組を紹介いたします。

一 九州大学における取組

九州大学は平成一八年度に、文部科学省の科学技術振興

調整費「若手研究者の自立的環境整備促進」プログラムに「次世代研究スーパースター養成プログラム（SSP）」を応募し、採択された。九州大学のプログラムは現在三年目を迎えている。日本版テニユア・トラック制度を根付かせることを目的に開始された事業であるが、若手研究者の養成にとどまらず、現在も一部研究分野で残っている「分野が固定化しやすい」等の旧講座制の弊害を解消すべく、組織改革を盛り込んだ独自の「九大モデル」を構築し、全学に大きなインパクトを与える成果を上げている。当初の予定では五年間の事業終了後に総長裁量経費でこのプログラムを継続して行う予定であったが、初年度のスタート時に大きな効果が期待されることが予想されたので、梶山前総

長の決断により、既に二年目の平成一九年度から前倒しで規模を拡大して実施している。現在までに国際公募と厳正な審査で採用された二四名の優秀な若手研究者が着々と成果を上げつつある。

二 「九大モデル」の特徴

「九大モデル」の特徴は、「若手研究者の自立的環境整備促進」プログラムに申請する時点で募集する研究者の研究分野を決めず、採択後、学内の大学院・研究所等の部局に『若手研究者の育成』に加えて『新領域開拓』、『組織改革』の三つを盛り込んだ研究プロジェクトを提案させ、その内容を部局間で競争させることとした点にある。研究戦略委員会における書面、プレゼンテーションの二段階審査を経て、参加部局と個々の研究プロジェクトに採用できる若手研究者（スーパースタープログラム（SSP）学術研究員）の人数を決定した。

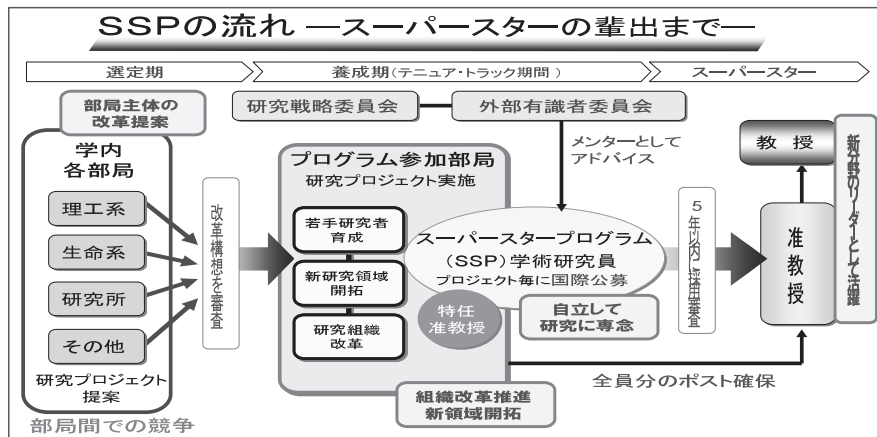
この研究プロジェクト募集にあたり、五年後のテニユアポストを準備することを条件としたため、当然ながら各部局で将来構想を含めた組織改革に関する議論がわき起こった。このプログラムを上手く組織改革に活かし切れた部局、

或いは議論の段階で意見がまとまらず、研究プロジェクト申請を見送った部局と状況は様々であったが、この機会に部局の将来構想について真剣・活発な議論が喚起されたことで、この経験が今後の改革論議にも生かされることが期待される。この点から総長判断により事業終了後の予定を早めて二年目の平成一九年度から事業拡大を図った。

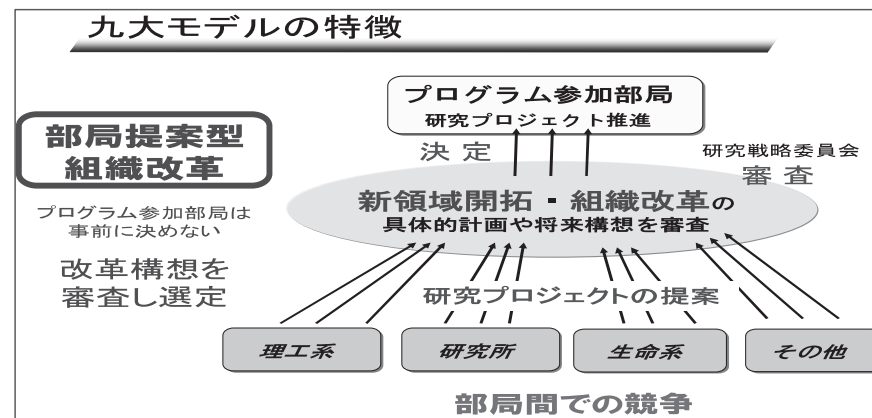
二段階の審査を経て六件（二年目は三件）の参加プロジェクトが決まると次は国際公募である。Nature誌を始めとする国際学会誌あるいはWebサイトに公募情報を掲載し、新領域開拓の研究プロジェクトに参加するSSP学術研究員を研究プロジェクト毎に募集した。応募する側も研究プロジェクト参加の形で公募されたため、求められる研究領域の具体像をイメージしやすかったようである。

研究プロジェクト毎に倍率の差はあるものの、二年間で二四名のSSP学術研究員の募集に対し、海外も含め延べ三七三名の応募があり、書面審査、外部有識者を交えたプレゼンテーションと厳正な審査を実施した。適任者が見つからない場合は再募集も行った。

採用されたSSP学術研究員は研究プロジェクト実施部局の特任准教授の称号を付与され、年間六〇〇～七五〇万円の給与と六〇〇万円の研究費（一部三〇〇万円）の厚待



SSPのしくみ (タイムチャート)



九大モデルの特徴

三 取組の効果と今後への期待

SSP学術研究員は国内外の複数の研究機関を経験した実績のある若手が大半を占めており、部局内、学内外の他の研究者へも大きな刺激となっている。また大学院の学生にとっても活躍している若手研究者から直接助言を受け、共に討論することで研究に対するモチベーションを高めている状況が見られる。一方部局のマネージメントを行う側に対しては、この九大方式により非常に優秀な若手研究者が国内外から多く採用出来ることを経験させることができ、新規の教員募集に同様の方式を行う部局も出てきている。

「九大モデル」に対する評価は高く、日経BP誌³⁾、科学新聞⁴⁾に取り上げられたほか、文部科学省の委員会、シンポジウム⁵⁾等でも紹介されている。

タイトルの「スーパーstar」という言葉のインパクトが強いため、採用されたSSP学術研究員はこの言葉に当初一種の照れを感じていたようである。しかし、いずれの研究者も次世代のリーダーたり得る意欲と能力のある優秀な研究者であり、今や堂々と自信をもって研究活動を推進している。全てのSSP学術研究員が将来大きく羽ばた

遇が措置された。また、独立した研究スペースの提供等、研究分野の特性に応じて研究プロジェクト毎にスタートアップの設備整備の支援がなされた。

本プログラムの養成期間中、各研究プロジェクトの目的である新領域開拓に向け、部局関係者から支配的干渉を受けることなくSSP学術研究員が存分に実力を発揮出来るようにする仕組みが必要である。そのため学外有識者および学内研究戦略委員からなる外部有識者委員が、定期的に現地視察やSSP学術研究員との個人面談を行い、プログラムの趣旨に沿った運営が成されているかを調査し、大学に対して意見を述べるとともに、SSP学術研究員に対してメンターの役割を果たしている。

プログラム参加部局ならびに大学は、三年目の中間評価を経た期間終了時に、SSP学術研究員が将来の研究スーパーstarとして活躍出来るだけの実力を高め、実績を上げたかどうかを含め、正式な准教授としての採用の可否を審査する。もちろん中間評価の段階で十分な実績があると認められる場合には期間終了を待たず、准教授として採用する。

進行中の9件の研究プロジェクト

	研究プロジェクト名	実施部局	採用人数
平成18年度開始	時空間階層生命科学	理学研究院	4
	数学・数理学における未解決問題挑戦プロジェクト	数理学研究院	2
	ヒト幹細胞システムの医学的応用への研究拠点の創出	医学研究院	4
	ヒューマンセンターロボティクスプロジェクト	工学研究院 システム情報科学研究院	3 (2)
	社会情報基盤構築	システム情報科学研究院	3 (2)
平成19年度開始	生体防御におけるポストゲノムサイエンス	生体防御医学研究所	3
	感性を切り口とした「心」の科学拠点の創成	人間環境学研究院 システム情報科学研究院	2 (2)
	超分子ナノデバイスフュージョンプロジェクト	工学研究院	1 (1)
	食シグナルバイオロジーに支援された植物サイエンスの拠点形成	農学研究院	2 (2)

※()内は総長裁量経費による採用者数(内数)

SSP研究プロジェクト一覧 (平成20年10月31日時点)

- (4) 平成一九年七月二六日 科学技術・学術審議会 人材委員会(第三七回)
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/siyutu/giyutu10/gijiroku/07112611.htm
- (5) 平成二〇年三月六日 『文部科学省研究開発評価シンポジウム』
http://www.mext.go.jp/a_menu/kagaku/hyouka/sympo/h19.htm

て新しい研究領域を開拓し、各研究分野でのリーダーひいてはスーパースターとなることを強く期待している。
 (九州大学 研究担当理事・副学長 村上 敬宜)

終わりに

科学技術振興調整費「若手研究者の自立的な研究環境整備促進」プログラムは、テニユア・トラック制の導入を中心とした、若手研究者が自立して研究できる環境の整備を促進することを目的としています。そのため各機関においては、今まで紹介した東京農工大学や九州大学においてすでに取組が始まっているように、導入したテニユア・トラック制が実効性あるものとなるよう、以下の点についても取組を進めることが期待されています。

①公募・審査方法の改善

多様で優秀な若手研究者を採用するためには、自校出身者比率が過度に高く成らないよう留意するとともに、優秀な女性研究者や外国人研究者の採用にも力を入れる必要があります。そのために、国際公募や、学外委員を

含む透明性の高い審査等が実施されることが期待されています。

②システム改革

本プログラムによる取組が限られた部局にとどまらず、機関全体の人事システム・人材養成システムの改革につながるよう、機関の長によるリーダーシップが期待されています。

③取組の継続性

五年間にわたる本プログラムの支援終了後も、テニユア・トラック制を始めとした制度が定着・発展していくために、自己資金による制度の運営を見据えた取組が必要とされます。

(文部科学省 科学技術・学術政策局 基盤政策課)

参考資料

- (1) プログラムの詳細は以下のURLを参照のこと。
http://www.srp.kyushu-u.ac.jp/ssp_home/index.html
- (2) 日経BTJジャーナル二〇〇七年七月号 二頁～五頁
<http://biotech.nikkei.jp/co.jp/btjn/#btj0707>
- (3) 科学新聞 平成二〇年一〇月三日および 一〇月一〇日号
 「九州大学 次世代研究スーパースター養成プログラム」
 ⑬、⑭